

陽ざしのやわらぐ午後でした。夏の名残がまだ少しだけ残る風が、台所の小さな窓をそっと揺らしておりました。

戸棚の奥から取り出したのは、古びたガラスのうつわ。もうずいぶん前に、ひびが入ってしまったものです。けれど、私はこのうつわを捨てられずにおりました。かけたところは、金で繕ってあります。その金の筋が、ひびを責めることなく、むしろその存在を肯うように、やさしく、ゆるやかに光っておりました。

氷をひとつ、ころんと入れ、ゆっくりと水出しのお茶を注ぎました。すると、ぱり…と小さな音がして、氷に繊細なひびが走りました。ほんのわずかな力で、透明だった世界に、ゆっくりと線が生まれてゆきました。

その中を、茶の色がじわじわと染みこんでゆきます。

その様子が、なんとも美しく、愛おしく、私は言葉もなく、ただじっと眺めておりました。

器の中で起こっている、静かな色の移ろい。それはどこか、人生のようにも感じられました。

最初は澄んでいて、よどみなく、けれど時を重ねるごとに、喜びや悲しみや、

思いがけないことたちが、

少しずつ、自分という器を染めてゆくような。

そんなことを、ふと思いました。

このうつわにも、いくつもの出来事がありました。

ひびが入った日も、よく覚えております。

あれは孫たちが遊びに来ていた、にぎやかな夏の午後でした。ひとりがテーブル

ルにぶつかって、

うつわが床に転がり、かちん、と乾いた音がして。ああ、もう終わってしまう

のでしょうか…。と一度は思いました。

けれど、不思議と悲しくはありませんでした。むしろ、ひとつの出来事とし

て、器が私たちの時間を吸いこんでくれたような、そんな気がしたのです。

だから私はそれを繕い、大切にしまっておいたのです。以来、このうつわ

は、私の中でひととき特別な存在になりました。完璧でないその姿が、まるで

私自身のようにもありました。

人はみな、どこかにひびを抱えて生きています。

それを隠すのではなく、そっと見つめて受けとめること。そこにこそ、美しさが宿るのではないかと、最近はよく思うようになりました。

氷が少しずつ溶けていく音が、まるで時のしずくのように、静かに響いておりました。その音を聞きながら、私は器をそっと両手で包みました。

重さはほとんどありません。けれど、たくさんの記憶が詰まっていて、手のひらに伝わるそのぬくもりに、なんとも言えぬ安心を覚えました。

外の光が少し傾いてきて、うつわのひびを、斜めから照らしておりました。その筋にそって、茶の色がほんのりと重なっていて、まるで、金継ぎではなく、茶継ぎでもしたような、そんな穏やかな景色になっていました。

このうつわも、ずいぶん年をとったなと思いました。

けれど、それは悪いことではなく、どこか誇らしいことのようにも感じられました。古びたものにしか出せない深みがあることを、私はこの器から教わったように思います。

お茶を飲み終えて、ふうと息をついたとき、器の底に、わずかに残った茶の色が、ゆらりと光に揺れていました。それは、これまでに見たどんな宝石よりも、優しく、柔らかく、静かな輝きでした。

私はそっとつぶやきました。「ありがとう」と。

それは器に対してであり、時に対してであり、この小さな午後に対してでもありました。

また、明日もこの器でお茶を淹れようと思いました。

少し冷たく、そしてほんのりと温かい、やさしい色のお茶を。